唖の妖女

田中貢太郎

明治七年四月のこと、神奈川県多摩郡下仙川村浅尾兼五郎（あさおかねごろう）の家へ妖怪（ばけもの）が出ると云う噂がたった。

それも一度や二度のことでなく、前年の五月から怪しい事が続くと云うので、県庁でも捨て置けずとあって、兼五郎の家へ人をやって取調（とりしらべ）さしたが、原因も判らず相変らず怪しい事が起った。そこで、県警察部でも兼五郎を召喚して、これ亦（また）峻烈（しゅんれつ）な取調をしたが、兼五郎の所為（せい）でないから、どうすることもできなかった。

某日（あるひ）のことであった。兼五郎の細君（さいくん）が台所で飯を焚（た）いていると、突然釜がふわりふわりと天井の方へあがりはじめた。これには女房も蒼くなって、

「ああ、もしもし、そのお釜をお取りあげになることだけは、どうぞおゆるしくださいまし、どうぞお返しを願います。この通りでございます」

と云って、台所の羽目板へ額をつけて歎願した。すると釜はひょこひょことおりて来て、原（もと）の竈（へっつい）へかかった。

また某時（あるとき）、来客があったので、兼五郎は奥座敷へ通して対手（あいて）になっていると、俄（にわか）に膝の下がむずむずして来た。何だろうと思って手をやってみると、古草履（ぞうり）が一つにょきりと出た。これはと驚いて起ちあがると、また一つ飛びだした。

又某時（また）、庭の方でがらがらと云うような大きな音がしたので、見ると庭の片隅に立てかけてあった竹竿が二本、人の歩くように並んでのそりのそりと歩いていた。家の者が驚いて見ているとどこからともなしに越後縮（ちぢみ）の浴衣と洋傘（こうもりがさ）が飛んで来た。と、竹竿の一つはその浴衣を著（き）、一つは洋傘をさして歩いた。

又某日のこと、兼五郎は隣家の下駄屋から鍬（くわ）を借りて来て、使用した後で縁先へ立てかけて置くと、間もなく下駄屋の主人が取りに来たので、返そうと思って縁先へ往ってみると、置いたばかりの鍬がもうなかった。どこへ往ったろうと思って、血眼（ちまなこ）になって捜して

いると、突然その鍬や［＃「その鍬や」はママ］縁の下からひょこりと頭を出した。

「おや、こんな処（ところ）に」

兼五郎は腰を屈（かが）めて取ろうとすると、鍬は忽（たちま）ち引込んでしまった。暫（しばら）くして又頭を出したので取ろうとすると、又ひょいと引込んで往って取れなかった。そして、その中（うち）にとうとうどこへか往ってしまった。

ところが、兼五郎の家に唖娘がいて、そんな時の紛失物の所在を能（よ）く知っているので、その時前へ来た唖娘に手真似で訊ねたところで、唖娘は畑の前方へ指をさした。そこで往って見ると、果して鍬が草むらの中

から出て来た。

又某時、兼五郎の家へ近所の女が来て、台所口で兼五郎の女房と話していると、突然裾（すそ）がまくれあがった。近所の女は悲鳴をあげて両手で裾をしっかと押えたが、着物はますますまくれあがっておりなかった。

その他、茶碗が宙乗りをしたり、砥石が屋根から落ちて来たり、怪事は次から次へと尽きなかった。

隣村の伊太郎と云う血気盛（ざかり）の壮佼（わかいしゅ）が、某夜（あるよ）酒をひっかけて怪物の探検に来たが、その途中どこからともなく礫（こいし）が飛んで来て、眉間に当って負傷したので蒼くなって逃げ帰った。

こうして怪異は毎日のように続いたが、その怪異の起る前には、きっと啞娘が姿を隠すのであった。

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　　２００３（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「新怪談集　実話篇」改造社
　　　１９３８（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２０１０年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。